

広瀬隆「二酸化炭素温暖化説の嘘が警告する地球の危機」

連載「テレビ報道の深刻な事態」

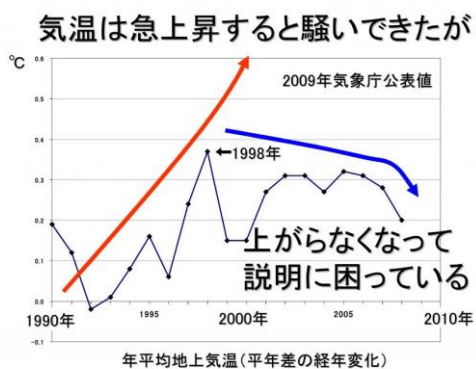
<https://dot.asahi.com/wa/2019082100001.html?page=1>

広瀬隆 2019.8.21 16:00 [週刊朝日](#) #広瀬隆



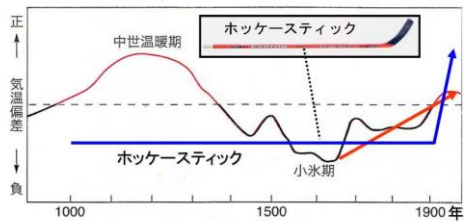
広瀬隆（ひろせ・たかし）／1943年、東京生まれ。作家。早稲田大学理工学部卒。大手メーカーの技術者を経て執筆活動に入る。『東京に原発を！』『危険な話』『原子炉時限爆弾』『FUKUSHIMA 福島原発メルトダウン』『第二のフクシマ、日本滅亡』などで一貫して原子力発電の危険性を訴え続けている。『赤い楯—ロスチャイルドの謎』『二酸化炭素温暖化説の崩壊』『文明開化は長崎から』『カストロとゲバラ』など多分野にわたる著書多数。

🔍 拡大



🔍 拡大

1990年(19年前)のIPCC第1次報告書には
正しく中世温暖期と小氷期が明示されていた



答は簡単。気温上昇はるか昔から始まった地球の自然現象であった。

🔍 拡大

今回は、これまで述べてきた韓国／北朝鮮問題ではなく、地球の自然に関して二酸化炭素温暖化説が科学的に間違えている、というテーマで、みなさんの頭に一撃を加えてみよう。

「二酸化炭素温暖化説が警告する地球の危機」ではなく、それが大嘘だという話なので、間違えないように。

【気温は急上昇すると騒いできたが…グラフで見た年平均地上気温の変化はこちら】

昨年は、西日本の大水害と関西を襲った大型台風と北海道の大地震に苦しめられ、同時に夏の猛暑を体験した。そこでテレビ報道に出演するコメンテーターたちは、出てくる人間ほぼ全員が、「2018年の夏は異常な猛暑だっ

た。災害の原因は地球温暖化である」と口にした。彼ら彼女らは、「地球温暖化は、もはや議論する必要もない」とまで、言いたそうであった。ところが彼ら彼女らは、ただの一人も「二酸化炭素（CO₂）の放出によって地球の温暖化が加速している」という自分たちの簡単な主張を、科学的に実証しようとはしなかった。どうも日本人は、他人の噂話に惑わされやすく、子供でもわかる科学を議論することが苦手なようだ。

私は『二酸化炭素温暖化説の崩壊』（集英社新書）の著者として、CO₂による地球温暖化説が間違いであることを科学論によって実証したが、同書を2010年に発刊してから、すでに10年も経とうとしているので、わかりやすく要点を本稿に記述する。CO₂による地球温暖化説の嘘について説明するのに、私の講演は普通4時間だが、本稿3回にわたってエッセンスを述べる。

石油や石炭を燃やした時に発生するCO₂によって地球が温暖化するという説を流布してきたのは、国連のIPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change——気候変動に関する政府間パネル）で、その名の通り、いかにも怪しげな政治集団である。このIPCCは、過去に人類が明らかにしてきた考古

学、文化人類学、生物進化学、気象学、地質学、宇宙科学のすべてのデータをまったく無視して、根拠のない「疑似科学」を人類の頭にすり込んだ。

[次のページ](#)

[2020年にはロンドンもニューヨークも水没？](#)

2015年までこのIPCC議長だったラジェンドラ・パチャウリは、アメリカ副大統領だったアル・ゴアと共にCO2温暖化説を煽（あお）って、ノーベル平和賞を受賞した人物である。CO2温暖化説が、ノーベル物理学賞に値する科学的真理ではなかったのに、平和賞が与えられたのである。このパチャウリ前議長は、温室効果ガス（CO2）の排出権取引で莫大な利益を得る銀行の顧問をつとめ、この取引で多国籍企業とエネルギー業界が生み出す資金を、パチャウリ自身が理事長・所長をつとめる「エネルギー資源研究所」に振り込ませていたことが、2010年1月に発覚した。IPCCは、CO2を食べ物にする詐欺グループだったのである。

実は、1988年にIPCCが設立された時、初代議長に就任したバート・ボリンが、「2020年には海水面が60～120メートルも上昇し、ロンドンもニューヨークも水没している」と予測して、CO2温暖化説を煽ったのだからたまげる。2020年とは、来年である。120メートルというのは、新幹線5輦分の長さを縦に立てた高さである。来年に東京オリンピックを開催している時に、天を見上げるほどの海水でロンドンもニューヨークも水没している、と信じるのは、もはや新興宗教である。テレビ報道に出演するコメンテーターたちは、「2018年の夏は異常に暑かった。地球温暖化が原因だろう」と、つい口にしたが、まさか彼らも、IPCCの詐欺師集団やCO2学説を信じる新興宗教のために、そのようなことを主張するほど愚かではあるまい。

しかし今年も5月に北海道で猛暑を記録したので、CO2温暖化説の信奉者たちが勢いづくことが心配だ。

実は、この問題を真剣に考えてきた賢明な読者であれば、1998年頃まで「温暖化、温暖化」と騒いでいた人類が、最近では「異常気象、異常気象」と言葉を変えてきていることに気づいているはずだ。IPCC集団が、なぜ表現を変えたかという理由は、科学的にはつきりしている。

このグラフのように、1998 年をピークとして、それ以後 10 年間も地球の気温が上昇せず、むしろ温度が下がる期間が続いた。その間に、驚異的な経済成長を続ける中国でもインドでも、CO2 の排出量が猛烈に増え続けて、地球の大気中の CO2 濃度の最高値が毎年更新されていたのである。したがって、CO2 が増加しても地球は温暖化しないことが、誰の目にも明らかとなった。CO2 温暖化説は科学的に崩壊したのである。

気温上昇が続いた 1998 年まで「CO2 地球温暖化説の誤り」に気づかない人間が多かったことは仕方ないにしても、2010 年になってもその過ちを認めなかったのが、現在のよ
うに虚構の地球科学が横行しているのである。

地球の気温が上昇していた 1990 年代には、NHK テレビがニュースの冒頭に「南極」の氷が崩れ落ちる映像を流して、「温暖化対策は待ったなし」と叫んでいた通り、「南極の氷が溶けて地球が水没する」という説は、地球温暖化の脅威を煽る目玉であった。ところが、現在では誰一人、南極を口にしない。どうしたわけなのか？ それは、南極では 2010 年代に入って氷が溶けるどころか、逆に分厚い氷と大量の積雪に、南極観測隊が四苦八苦する寒い年が続いた上、「南極の氷が崩れ落ちるのは、分厚い氷の重さのためであり、太古から続いてきた自然現象だから、人類による CO2 の排出とは無関係なんだよ」と指摘されて恥をかいたからである。

IPCC が CO2 による温暖化を強調するために「第 3 次評価報告書（2001 年 1 月）」に明示し、全世界を欺いてきた有名な「ホッケースティックの図」（IPCC が主張してきたグラフの青線→で示される地球の温度変化）は、実際にあった“中世の温暖期”もその後の“小氷期”も抜けている「誤りだらけのデータ」であることが暴露されて、IPCC 第 4 次評価報告書（2007 年 11 月 17 日）から削除されてしまった。つまり「1900 年代の 20 世紀に入って、工業界の CO2 放出量が急増したので、地球が急激に温暖化した」と主張していた IPCC は、「ホッケースティックの図」が真っ赤な嘘だと認めたのである。

（広瀬隆）

※週刊朝日オンライン限定記事